

特集

# 音楽づくり 創作 鑑賞

～「言語活動の充実」とともに考える～

—ほんね オン ミーティング—

創作や鑑賞などの活動をどう充実させていくか——

という大きなテーマで行われた小学校と中学校の先生方によるミーティングです。

「言語活動の充実」が学習指導要領改訂の基本的な考え方となっていることを受け、

音楽科の授業においていかに言葉が重要であるかについて、創作や鑑賞の活動を軸にしながらの話し合いとなりました。

ミーティングが長時間に及んだことから、

今回は参加された先生方ごとに発言をキーワードでくくりながら紙面を構成しました。

小学校、中学校の意見交換といった『ヴァン』ならではのライブ感覚が、少しでも多く紙面に反映されていれば幸いです。

ミーティング進行役に板橋区立徳丸小学校の石上則子先生。

また、最後にまとめとしてオブザーバーの小原光一先生からメッセージをいただきました。

## 参加者

石上則子先生 [板橋区立徳丸小学校]

大湊勝弘先生 [世田谷区立松丘小学校]

叶こみち先生 [北区立堀船小学校]

後藤京子先生 [練馬区立石神井小学校]

星野朋昭先生 [板橋区立高島第三小学校]

古江英美先生 [板橋区立赤塚第一中学校]

谷山優司先生 [町田市立金井中学校]

小原光一先生





# 石上則子

[板橋区立徳丸小学校教諭]

## ▶石上先生からのキーワード

- ・音楽づくりも他の活動同様、積み重ねが大切
- ・ぐちゃぐちゃしているところが大事
- ・音楽づくりと言葉
- ・教師自身が豊かな音楽的語彙をもつ
- ・言葉は人間関係づくりにおいても大切
- ・言語活動の充実に関して、音楽科はたくさんの可能性をもっている
- ・自分で努力して、教材を研究する
- ・表現と鑑賞の関わりにもいろいろな方法がある
- ・聴き方を学ぶ

## ●音楽づくりも他の活動同様、積み重ねが大切

どの活動においてもそうですが、低学年のうちからいろいろな音——効果音も含めて——に触れておく体験が大切だと思います。音楽づくりは、単独の題材として扱うのではなくなかなか難しい面もあるので、器楽や歌唱、鑑賞につなげていくことが大事です。それぞれの学年の感性でつくるのでよいし、いつも大曲を目指さなくてもいいんです。常時活動を積み重ねること、つくったものを生かすこと、そして発表することも大切だと思います。つくったものを学校行事の中に組み込むことが効果的だと思います。卒業式で、子どもが証書を受け取る時に、一人一人がつくった8小節ほどの曲を流したこともあります。

## ●ぐちゃぐちゃしているところが大事

音楽づくりは「ぐちゃぐちゃしてしまう」ものではないでしょうか。普通それは研究授業などではあまり見せませんよね（笑）。そうした一面が、音楽づくりの学習活動・内容の分かりにくさに影響しているのかもしれませんが。しかし最近では「ぐちゃぐちゃしているところも大事なんだ」という意見も出るようになり、区の研究会などでも「そこはそのまま見せようね」という傾向になってきました。

## ●音楽づくりと言葉

音楽づくりを例に言葉について考えると、声や言葉と関

連した実践があることが分かります。オノマトペをはじめ、さまざまな様子を言葉のリズムにのせ表情をつけ、表現していくことができます。以前の勤務校では、4年生以上の学年で「都営三田線のヴォイスリズムをつくろう」と、駅名にのせてリズムをつくり、連合音楽会で発表したことがありました。早口でものを言うなどといった活動を織り交ぜていくことにも、学習の発見はあると思います。

また、「発声する」という面での言葉にも、もっと注目してよいと思います。考えたり感じたりするための言葉だけではなく、発声したり発音したりする、音としての言葉も、子どもがより音楽の楽しさを感じ取るためには重要です。みんなで共通の思いを感じ取りながら合唱を仕上げていくような活動も、言語活動という意味で大事なかなと思います。

## ●教師自身が豊かな音楽的語彙をもつ

いろいろな語彙が必要なのは、国語科に限らず、音楽科についてもいえると思います。歌には歌詞がありますが、言葉の付いていない器楽曲でも、感じ取ったことを整理していくには言葉が必要です。言語活動を豊かにするためには、子どもが自分の思いや感じた事柄を伝えることができるよう、意識して指導していくことがまず大事だと思います。教師がどれだけ豊かな音楽的語彙をもっているかによって、子どもたちから導き出せるものも違ってきます。同じ一つのものを感じ取っていくにしても、教師が「違うでしょ、違うでしょ」と言うだけでは子どもからは何も出てきません。「こういうふうにしたらどう？」といった教師からの具体的な言葉による手だてがすごく大事になるのだと思います。

## ●言葉は人間関係づくりにおいても大切

音楽づくりは、音をどのように構築していったらいいのか、ということを考える活動でもあります。考えていくためには、〔共通事項〕が一つの重要な手だてになりますが、どうつくっていくのかを話し合うコミュニケーションも必要になってきます。言語活動が豊かでない子どもたちの場合、すぐけんかになることがあるんです。だから、ある意味で音楽活動を充実させるためには、子どもたちがもっている言語、易しいけれど豊かな語彙というものが、人間関係をつくっていくために大事なかな、と思います。

それから、「話す」ということは慣れていないとできないところがあります。小さいときから話したり表現したりしていないと、自分の考えをすぐには言わない、言えないといった傾向があるのではないのでしょうか。高学年になると、よけいそうになってしまいます。でもそれを言えること、

言える雰囲気をつくるのが、互いを理解し合うためには重要なですね。

## ●言語活動の充実に関して、音楽科はたくさんの可能性をもっている

音楽づくりでは、言葉がとても重要だということはお話ししてきたとおりです。子どもどうしが会話をし、互いに分かり合い、伝え合おうとしていく中で、話す言葉は豊かになっていきます。子どもたちが「ここはこうしていこうよ」と言ったとき、それに反対した子どもの意見をどこまで受け入れて、それをどうやって生かしていくのか。そこで、先生の言葉かけが大事になるのではないかと思います。言いたいことがある子どもに対しては、「あなたはどうか考えているの?」とか、困っている子どもには「こうしたらうまいくんじゃない?」というように。言語というより、教師側の感性の問題に関わるかもしれませんが、教材研究を含めてそうした力を自分自身で磨いていくことが、これからの教師に必要なことだと思います。

また、本校では昨年英語教育の研究を行いました。講師の方々から必ずお聞きするのは、「音楽を取り入れると英語活動はうまくいくんですよ」という話。私の姉も英語が苦手な、ビートルズやモンキーズを聴いて英語を勉強し、ようやく受験を突破しました(笑)。鑑賞での言語活動が強調されがちですが、実はもっといろいろなところで言語と関わる音楽をやっているのではないかと思います。歌詞の内容を生かして表現を工夫したり、英語で歌ったり、ヴォイスリズムをするなど、言語活動の充実に関して、音楽科はたくさんの可能性を持っていると思います。

「言語活動の充実」が示されたから何かを新しく始めるというのではなく、私たちが今まで行ってきたことをもう一度振り返ることも大切です。先日、校内音楽会があったのですが、しっかりと口を開けてはっきり発音している子どもたちの歌唱表現は言葉が明確で、聴いている人たちの心を打ちました。身近なことから見直してみるのもいいかもしれません。

## ●自分で努力して、教材を研究する

私たちの時代には音楽づくりの授業をしようと思ったら、そのために足しげく合羽橋まで行っていちばんいい音の出るフライパンを探すなど(笑)そういうことをしていたと思うんです。例えば、「BACHの音楽をつくろう」と思ったら、資産をはたくまではいかないけれど(笑)、自分で何枚もCDを探して買う努力をしました。今の若い教師たちの中には、そういった下準備や資料集めを怠って、前例などに頼ってスタートしてしまう人が多いと感じることが

あります。受け身なんです。それが自分の語彙を増やせない大きな原因になってしまうし、音楽づくりに飛び込めない要因の一つにもなっているのかな、と思います。大変かもしれないけれど、「まず自分から教材をどうしたらいいのか学ぼうよ」と言いたい。そうやって自分で努力していくことが子どもにも伝わっていくのだと思います。

## ●表現と鑑賞の関わりにもいろいろな方法がある

音楽づくりと鑑賞の関連については、音楽づくりをするためにまず聴かせる以外にもいろいろな方法があると思うんです。もちろん、鑑賞によって音楽づくりのヒントが見つかるということはあるかもしれませんが、でもそれだけではなくて、音楽づくりしてから鑑賞する方法もあります。私はどちらかというとそちらのほうが好きなんです。

例えば、「BACHの音楽をつくろう」という題材で授業を進め、最後にプーランクの『BACHの名による即興的ワルツ』を聴かせると、子どもたちは自分たちで音楽をつくってみたあとなので、鑑賞したときにB-A-C-Hのメロディーがどう動いていくかということを感じ取ることができました。「あっ、ここで流れた」とか「私たちがつくった音楽はこうだったけど、この曲ではこんなふうに変わっていくんだ」などのように。やっぱり本当の音楽というのはすごいな、作曲家ってすごいなと思ってみたり、自分たちもまんざらじゃなかったな、と思ったり。「長くのびて使われたり、何回も繰り返して使われたりしていることが分かった」などと作文に書いてくれた子どももいました。

鑑賞の仕方はさまざまで、歌唱や器楽の活動のあとに聴かせるのも、音楽全体を味わうときには効果的かな、と思います。例えば、6年生で『スター・ウォーズ』を演奏する活動において、まず原曲を聴かせてから表現活動のあと再度聴かせたら、自分たちの演奏にどんな変化があったのかということも感じられると思うんです。

## ●聴き方を学ぶ

音楽の聴き方、感じ取らせ方は、ねらいによってさまざまだと思います。例えば音楽の要素のうち、「強弱を感じ取らせたい」というねらいを明確に出す聴き方もあれば、「楽曲全体の雰囲気を感じ取らせたい、味わわせたい」という場合もある。けれどもただ鑑賞して「この曲が大好きになった!」というだけで終わってしまえば、なかなか表現活動にはつながっていきません。

音楽の要素や仕組みなどに焦点を当てて聴く鑑賞活動が大事、ということを新学習指導要領が示している気がします。それは、楽曲そのものの味わいを感じ取ったあと、そ



れを「では、表現活動にどのようにつなげていこうか」というときに特に関わってくることです。だからといって「楽曲全体を味わう鑑賞」を否定することもないと思っていますが…。

「聴くこと」を課題としている本校では、校内音楽会のあとに「よかったことをそれぞれの学年のお友達へのお手紙にしてみよう。どこがよかったのか、はっきり書いてあげないと分からないからね」というふうに手紙を書いてもらいました。低学年の場合は「お兄さんお姉さんたちはすごく迫力があってよかった」というような全体的な気分を

感じ取っていますが、学年が上がるにつれ、細かい部分や音楽の要素の関わり合いも感じ取って聴けるようになってきます。そんなことから、やっぱり積み重ねが大事ななと思いますし、互いに聴き合って演奏のよさを感じ取りそれを相手に伝えることも、鑑賞の能力として認めたいな、と思っています。そういった「互いに学んでいく力」の育成と、「楽曲そのものを聴いて、そのよさを味わいながら次の学習に生かしていく」鑑賞の活動が組めたらいいな、と感じています。



## 大湊勝弘

【世田谷区立松丘小学校主幹教諭】

### ▶大湊先生からのキーワード

- ・「自分でもできる！」という肯定感
- ・小中連携の実践
- ・「鑑賞教育」と「言語活動」の意味
- ・言葉・身体表現・絵や図形など

### ●「自分でもできる！」という肯定感

音楽の活動（主に表現の歌唱と器楽）でほとんど何もしない子どもがいます。話も聞けない。ところが、4人のグループで木琴を使った「雨の音楽づくり」をしたとき、その子が「おもしろい！」と食いついてきた。この教材は各パートの奏法がある程度パターン化されているので、誰でも自由に工夫できるものでした。

このことから僕は、非常にささいなことかもしれないけれど、音楽づくりというのは、ある意味ふだん音楽の活動に参加しないような子どもを救う活動でもあると思います。既存の楽曲を演奏することも大事だけれど、「自分でもできる！」という肯定感とでもいうのでしょうか、自分がそこに存在している、という、存在感を示すための一つのチャンスでもあるかなって、この学習を通して感じました。

### ●小中連携の実践

地域で連携している中学校で、2年生に「トガトン」の

授業をしました。時間も経験もない中での授業だったので、前もって中学校の先生に5人のグループを作っておいていただき、簡単な説明やビデオを見せてから行いました。そのときたまたま小学校の保護者が見学に来ていて「先生これおもしろいですね。小学校でもしたらどうですか」と言ってくさったので、「2学期に5年生で扱いますよ」という話をしました。この活動は、竹を使ってリズムアンサンブルをつくるという、いわゆる簡単なインターロッキングのリズムを使ったものです。

この授業では、ふだんリコーダーなどの合奏の中で見かける子どもとは違う動きが見えるんですね。話し合いで困っていることももちろんありますが、グループで楽しくコミュニケーションをとりながら楽しくやっている。そこに音楽が存在している。そういう雰囲気はとても大事だと思いました。

また、小学校の実践が中学校にもつながってほしいなと思います。時間数では厳しい面がありますが、そこをクリアしてやっと9年間の教科としての価値が出てくる。自分としては、この「竹を使った音楽づくり」の活動が中学校につながっていくとよいと思っています。

この座談会に参加していらっしゃる先生がたの実践も含めて、小学校・中学校で学習した音楽体験が土台となって、生涯教育につながっていくことが今求められていると感じました。

### ●「鑑賞教育」と「言語活動」の意味

「言語活動の充実」と言われますが、音楽の場合は言葉が先にくるのではなく、音そのものが存在し、それを子どもが「いいなあ」「何これ?」「もう一回聴いてみたいな!」などと感じるところがいちばん大事です。それを人に伝えていく。もっと共有していこうよ、この音楽っていいんだよ、という段階で言語活動が重要になってくる。

ところが言語活動では学力の問題として、思考力や判断力が問われてきます。「活動が中心で学習がない」と言われることが音楽科にはありますね。1時間の授業で何を学んだのかというところが、教科として厳しく問われるのではないかと思います。

「今日の1時間でいちばんしたいことは何か」。僕は常々こう考えていますが、そこが問われているのです。目標のためにどういう教材や音源を選び、どういう聴かせ方をするのか、今後ますますそのようなところが大事になってくると考えます。

## ●言葉・身体表現・絵や図形など

さきほども述べたように言語活動はとても大事なことですが、音楽って言葉にできない部分がありますよね。後藤先生がおっしゃった（→P.24）「風が吹いている様子を表

現してみよう」という身体表現も大事な要素の一つ。あとは絵や図形を描くこと。小学校の場合は言葉だけでは表現できないこともあります。そのあたりを上手に活用することが必要だと思います。

以前「ケチャ」を聴かせたとき、「この音楽を演奏している場面を想像すると、どんなふうかな？」と質問しました。言葉で書けない子どもには「分からない人は絵を描いてごらん」と言うと、“大勢の人が輪になっていて、火が燃えていて…”というようにイメージした子どもがいました。「ああ、なるほど」と何枚か見てみると、似たような絵がいくつもあります。何回も聴いて、みんな分かってきた。やっと「儀式的場面だ!」などの意見が出てきました。

小学校ではまだ語彙は多くないので、言葉も少ないのですが、絵や図形を使うことで広がりが出てきます。今の段階では、そこを出発点とすることで十分かなと思います。



## 叶こみち

[北区立堀船小学校教諭]

### ▶叶先生からのキーワード

- ・音楽づくりの魅力
- ・音楽づくりと鑑賞の関連を図る
- ・コーディネーターとしての教師
- ・子どもの言語活動の充実に向けて

## ●音楽づくりの魅力

もともと即興表現や音楽づくりに強い関心をもっていたわけではないのですが、即興的な音楽遊びや音楽づくりをいろいろと実践していく中で、子どもたちがどんどん音楽を好きになっていく様子を肌で感じ、これはすごいなと思うようになりました。それだけでなく、このような活動は、歌唱、器楽などの表現や鑑賞の能力の土台にもなると実感しています。

本校では、低・中・高学年の発達段階に合わせ、常時活動として、即興的な音楽遊びの活動を授業開始の5分程度行っています。音楽朝会でも全校で年に1回、即興的なリ

ズム遊びとアンサンブルを取り入れた活動を行っています。

年間を通した音楽の授業では、音楽づくりにばかり偏ることのないよう、歌唱、器楽、音楽づくり、鑑賞のバランスを大切にしています。本校には、金管楽器が多くあり、6年生になると数々の校内行事で金管バンドの編成で活動することが多く、子どもたちは、強いあこがれを抱いています。大体、年間の中で音楽づくりを中心に据えた題材は、1つか2つです。

ただし、歌唱や器楽、鑑賞の題材の中にも、音楽づくりに応用、発展できる要素はたくさんあるので、子どもたちの様子を見ながら、随時、音楽づくりを楽しんでいます。そうすると、どんどん子どもたちの意欲が増し、主体的に歌唱や器楽、鑑賞にも関わるようになります。結果的に、より歌唱や器楽や鑑賞の授業も充実しているという感じでしょうか。

## ●音楽づくりと鑑賞の関連を図る

一昨年11月の全日本音楽教育研究会全国大会「東京大会」において全体会記念演奏〈我が国の音楽に基づく即興表現と和太鼓による「東京の四季」〉に参加させていただきました。小・中・高・大学とが連携して一つの曲をつくる取り組みで、本校は「春」を担当しました。

音楽づくりをするために、鑑賞は非常に有効な活動でした。鑑賞に際し2つのねらいを設けました。まず1つ目は、新学習指導要領で新たに〔共通事項〕として示された「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」の再確認と



いう、分析的な扱い方です。低学年から常時活動として、即興的な音楽遊びを積み重ねてきた中で、リズムや強弱、音の重なり、拍の流れやフレーズなどの音楽を特徴付けている要素や、反復、変化などの音楽の仕組みについて、子どもたちの中に、ある程度知識があったため、たくさんのつぶやきが出てきました。ここで扱った鑑賞教材は『春の海』『鹿の遠音』などです。

2つ目は、箏と尺八のプロの演奏家に来校していただき、“本物の音”を聴くというねらいで、沢井忠夫作曲『鳥のように』などの現代邦楽の曲から古典までさまざまな“本物の音”に触れることで、子どもたちは「すごい！カッコいい！」「いろいろな弾き方、吹き方がある」など、知らない世界を知り、その多彩で、奥深い日本の楽器のよさに感動していました。

このような鑑賞の学習が、子どもたちにとって音楽づくりをするうえで、たくさんのヒントとなり、これまで以上にアイデアが豊かに広がったことで、話し合い活動も充実してきました。

## ●コーディネーターとしての教師

昨年の大会の取り組みを通して、教師はコーディネーターであるということを強く感じました。1年生から6年生までの発達段階を踏まえたうえで題材を設定し、教材を選び、子どもたちの身につけさせたい能力に迫るためにはどのような方法で、どういう与え方をし、どうアドバイスをしていくか、これらのことが教師の力量にかかっているのではないかと思います。したがって、教師自身がいろいろなことに精通して、豊かな経験を積んでいないと、上手なコーディネーターはできません。ゲストティーチャーについて

も、どういう時に、どんなタイミングで、どういうゲストティーチャーを呼び、何を子どもたちに学ばせたいのかということを考えなくてはならないのだと思います。ただし、教師側のコーディネートがいい意味で裏切られることはありますね。子どもたちの反応が想定外だったり、あるいは無反応だったりするようなときは、柔軟に軌道修正する能力も必要だと思います。

## ●子どもの言語活動の充実に向けて

今回の指導要領改訂では、子どもたちの言語活動の充実が、全教科を貫く力として重要視されています。私もこのことは数年前から強く感じており、授業中に「ミーティングタイム」と称して、話し合い活動の場を多く設けています。ただし、音楽の授業が国語の授業のようになっては本末転倒ですので、「ミーティングタイム」に割く時間はさっと短く、けれど継続性をもって…ということを心がけています。

また、昨年の大会に向けた「春」の音楽づくりでは、子どもたちのイメージを大切にしました。季節感の希薄な東京の子どもたちに対して、「春」のイメージを膨らませるにはどうしたらいいか、とても悩みました。そこでまず、五感に着目しました。今は「諸感覚」というようですが…。どうしたら子どもたちの五感を研ぎ澄ますことができるのか？まずは私自身が毎週末、自然のたくさんある場所へ行き、五感ノートをつけるところから始めました。しばらく続けていると、だんだん肉眼では見えないものの音が聞こえるようになってきました。

子どもたちにそんな私の体験を話し、「みんなの家の近所にも春はいっぱいあるよ、春探しをしてみよう」と、そこから「春」の音楽づくりはスタートしました。まず「春」をイメージする言葉を出し合いました。「ポカポカ」「そよそよ」「さわさわ」…子どもたちから発せられた言葉を使って“オノマトペ遊び”をしました。次に「春」って何色？と聞くと「桜のピンク」「新緑の黄緑色」「菜の花の黄色」…それらの色を色画用紙をちぎって巨大キャンバスに貼り、“春の色”づくりをしました。また、桜の花びらが春風に舞う様子を全員で体で表現しました。たくさんのイメージで心の中をいっぱいにし、多くの話し合い活動を経て、「春」は完成したのです。

イメージを一人一人の子どもの中で大きく膨らませたこと、そして、音楽の仕組みや、音楽を特徴付けている要素を即興的な遊びの中でたくさん体験させたこと、さらにそれらを鑑賞教材の中で再確認できたこと。すべてが、話し合い活動を活発にする要素となり、言語活動の充実にもつながったのではないかと思います。





# 後藤京子

〔練馬区立石神井小学校主幹教諭〕

## ▶後藤先生からのキーワード

- ・ 試行錯誤の中で～教師の学びの重要性～
- ・ 音楽づくりの手がかりとなる鑑賞
- ・ 子どもの言語イメージを広げる

## ●試行錯誤の中で～教師の学びの重要性～

教師になってなかなか挑戦できずにいた分野「つくって表現」、現在の「音楽づくり」に取り組むに当たって、最初は方法が分からず、他の実践や本を読むことから始めました。当時、学習指導要領の「創作」には、(ア)と(イ)の項目があり、歌詞の抑揚から旋律をつくったり、リズムを組み合わせてリズム伴奏をつくったりする(ア)に関しては比較的实践例もたくさんありましたが、自由な発想を生かして音楽表現を楽しむ(イ)に関しての実践例はあまりありませんでした。

サン＝サーンスのように、動物の動きや鳴き声を表す音楽をつくる、という題材で、「クジラは体が大きいから強弱を工夫して…」など、現在の〔共通事項〕に当たる工夫の要素やイメージは思いつくものの、もともになる音楽が何もないゼロからの音楽づくり。試行錯誤を繰り返したあと、どうにか自分なりの音楽づくりの方法を見いだすことができました。

教師が悩んだ時間が長かっただけあって、子どもたちはたいへん興味をもち、意欲的に取り組みました。何よりも、今まで苦手意識をもっていた子どもたちが「サン＝サーンスに負けないくらいの音楽が出来上がった」と喜んだことが、私にとってもこのうえない経験でした。

音楽づくりの場合、この「もともになるもの」の設定がとても大切です。音楽づくりは「時間がかかりそう」「難しそう」と思ってなかなか取り組めない先生がたや、初めて経験される先生がたは、まずこの「もともになるもの」の発想に関して、今はたくさんの書物や他の先生の実践例が紹介されていますので、ぜひ参考にされることをお勧めします。「まねをする」ことから課題が見えてきて、次の授業への発想が生まれてきます。私の実践を見て、校内の音楽会で、合唱の合間に子どもたちのつくった水の流れる音楽

を入れてみた…という先生のお話をうかがい、とてもうれしくなりました。

## ●音楽づくりの手がかりとなる鑑賞

「森のささやきをつくろう」という題材で、『森の水車』を3年生に聴かせたときです。「はじめにギギギという木が倒れるみたいな音がして、そのあとに水が流れるような音がしたから、林など自然の様子音楽だね」「水笛やカッコーの音がしたから、絶対に森だと思う」と効果音のような音に子どもたちは強い反応を示しました。

効果音ではない、イメージから音楽をつくる活動をするとき、表されている様子を楽曲からどのように感じ取るかということが大切です。曲名を提示して、「小鳥の声や水車の回る音以外にどんな森の様子が表されているか聴いてみよう」と投げかけても、「水車や小川、小鳥の声しか聞こえない」と断言する子どもがいます。何回か繰り返して聴いているうちに「あっ、風が吹いたような音がした」とある子どもが言います。「じゃあ、風が吹いたな、と思ったときに、風が吹いているような動作をしてみよう」と投げかけてみるとタラララララ～という始めのところで風を表す動作をしてくれました。そうすると「本当だ、風が吹いた感じがする」という子も出てきて…。そのあとで「木の葉っぱが動いた感じがする」という子がいたものですから「そこでも動いてみよう」と言うと、また動作で表してくれました。「風が吹くから葉っぱが動くんだね。音楽でそういうことも表せるんだね」と、子どもたちが気づく。そこで「ではこれから皆さんも森の音楽をつくりましょう」というふうに森の音楽づくりが始まるわけです。

音楽づくりをするときの鑑賞にはいろいろなねらいがあ



ると思います。タララ〜のように風を感じるような聴き方を工夫したり、「風が吹いたから木が揺れるんだね。風が“おーい”って言ったから木の葉っぱが“なあに”って言ったんだね」「問いと答えにみたいになっているね」と子どもたちから自然に出てきたり。グループで音楽をつくる時には、「川が流れたら“ぴちょっ”と魚が跳ねるとか、そういう関係のように音楽をつくっていくこともできるよ」などと説明します。こんなふうにして音楽の仕組みを感じ取る方法もあると思います。このように、音楽をつくる手がかりとして、私は鑑賞が欠かせないと思います。

## ●子どもの言語イメージを広げる

子どもたちの気づきがつぶやきにとどまり、言葉で語る能力にまで育っていないところが課題です。つぶやきを鑑賞の能力へとうまくつなげていくことが難しいですね。

「響き合うってどんな感じ？」と質問する際に「今日は

食べ物のイメージで考えてみよう」と具体的に発問をします。するとある子どもは「昨日お母さんが勉強のあとで入れてくれたココアに浮いてたマシュマロが、混ぜたら溶けていったように、響き合っていました」と一言。「声と声が溶け合っていた」ということを言いたかったのだと思います。もちろん、図や体で表す場合もありますが、子どもの言語イメージを広げることで、音楽づくりだけではなく、歌唱や器楽、鑑賞の活動でも音楽を豊かに味わい、友達や教師との関わり合いも深めることができると感じました。また、イメージをうまく表現できない子どものもう一つの手だてとして、「こういう言い方でもいいよ」と言っていると、子どもたちの発表意欲が高まり、自分の音楽表現や感じ取ったことにさらなる思いや意図をもって整理することができるようになりました。〔共通事項〕の言葉を使いながら「この曲のよさはここだね」と語れるようにしたいものです。



## 星野朋昭

〔板橋区立高島第三小学校教諭〕

### ▶星野先生からのキーワード

- ・ 学び手としての教師
- ・ 「丸ごと全体を聴く」と「要素を聴き取る」
- ・ 共につくって共有する

## ●学び手としての教師

教師になって最初の年はいつも指導書とにらめっこしていました。「魔法の音をつくろう」という題材を扱ったときは、「シャラン〜」と楽器を鳴らしただけの、ただの効果音で終わってしまい、それ以上どう進めたらよいのか分からなくなってしまいました。そのときは頼るものもなくて…。即興表現研究会に参加してからは、いろいろなアプローチを学びました。それでも失敗した例として、「コール アンド レスポンス」という言葉だけをもち帰り、自分で消化していないまま子どもたちに曲をつくらせてしまったことがあります。ようやく最近「繰り返しを使って水

を表現してみよう」などと子どもたちに伝え、そこから段階を踏んで授業を進めていくことができるようになってきました。音楽づくりには先達や学べる場が必要です。その一方で、学んだことを自分の中できちんと整理しなければなりません。うまくいった例としては、「ギラッ」を用いたガムランづくり。沖縄の五音音階を使い旋律をつくって重ねるというものです。子どもたちからは「アンサンブルが楽しかった」「仲間でひとつのものをつくる過程が楽しかった」という感想が挙がりました。また低学年では、「春夏秋冬」のイメージをまず擬音語におこし、それらを使ってどうしたら春らしく聞こえるか、などを考えながらクラス全体で四季を表現する活動を行いました。

## ●「丸ごと全体を聴く」と「要素を聴き取る」

自宅で鑑賞の授業のために曲を選んでいるとき、家族から「どうして“いい曲だったね”で終わっちゃいけないの？」と質問されました。それで「この曲はこういう目的をもって聴かせたいんだ」と説明しましたが、「本来の音楽を楽しむという目的を忘れちゃうんじゃないの？」と言われて、「そうだよね…」と、反論することができませんでした。

実際、授業で子どもたちに鑑賞させるときには、「この曲を聴いて、どんな感じがした？」と投げかけ、出てきた意見を黒板に書き出します。しかし曲の気分を感じ取るとに授業のねらいを絞っていくと、それだけで終わってしまい、「だからこういうふう感じたんだね」というとこ



ろに戻ることができません。「リズムによって楽しく感じただね」「旋律に美しさがあったんだね」という子どもに納得させ、授業で学んだことを感受につなげるということは、教師が状況を見ながら上手にリードしていかないと難しい、と日々感じています。

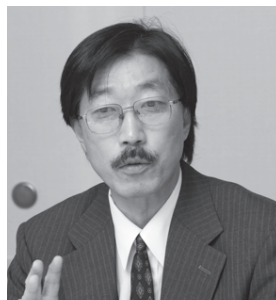
感じたことをクラスみんなで共有し、同じ気持ちになればいいのですが、そううまくはいきません。なぜそのように感じたのか、鑑賞して出たいろいろな意見をまとめ、その根拠を求めていくという作業が必要となってくるのです。本来の音楽を楽しむ心を育てるというところに戻るために、どのような問いかけや言葉かけが必要なのか、日々悩んだまま、家族に文句を言われながら（笑）何回も何回も同じ曲を聴いて、教材を探しています。

## ●共につくって共有する

今回座談会に参加して、他の先生方のお話をうかがいながら、自分は音楽について表現する言葉を「音楽そのもの」

にしか求めていなかったと気づき、たいへん刺激になりました。音楽以外の、食べ物や色、他のいろいろなことでも音楽を表せますよね。そういう身近にあるもののほうが感じたことにアプローチしやすいかもしれません。それは子どもが感じたことに直結するものだろうし。子どもの感性を引き出すために、いろいろな表現手段を自分で学んでいかなければいけないと思いました。

音楽づくりの活動で、グループに分かれたとたんに音出しを始めてしまったら、大抵の場合うまくいきません。涙を流すほど激しくけんかをするグループもあったりして（笑）。音楽づくりにおけるコミュニケーションは、子どもたちにとっても大切な機会となり得るのだな、と思います。子どもたちもコミュニケーションを楽しんで、話し合いを通して音楽をつくり上げることができるのはすごく素敵なことだと気づいてほしいですね。また、教師から与えられたものではなく、自分たちでつくり上げた作品だという満足感も味わってほしいと思います。



## 古江 英美

〔板橋区立赤塚第一中学校主幹教諭〕

### ▶古江先生からのキーワード

- ・ 創作では「制限の与え方」が大切
- ・ 小中連携の実践
- ・ 紹介文と批評

## ●創作では「制限の与え方」が大切

創作では、「いかに制限を与えるか」ということが重要だと思います。「このメロディーの後半部分をつくらう」「言葉のリズムや歌詞に合った音をつくる」などという制限をかけていくわけです。今取り組んでいるのは、和太鼓です。1クラスに2セット分の太鼓がそろったので、1クラスを2つのグループに分けて2人で1つの太鼓をたたいています。楽譜がなかなか読めないの「どっこい」「どどんこ」「すっとな」などの言葉を使っています。そして子どもたちには、順番にたたっている間に自分のアドリブを加え、

それをグループでつないでいくということをさせています。アドリブは2拍ずつのリズムパターンを4つ考えさせます。こうした活動を今、選択授業で行っています。創作だけで終わらせるのではなく、器楽から創作へつなげ、最後には鑑賞につなげる。そうすると、子どもたちは感じてほしいことを自ら理解してくれます。和太鼓であれば、器楽を用いた創作によって理解するので、鑑賞のときには「ここでユニゾン」「ここでアドリブ！」などと全体構成を分かって音楽を聴いています。ただ演奏するだけではなく、歌いながら、ということも大事です。そうすれば、歌唱、器楽、創作、鑑賞の柱ができます。しかしながら、音楽科は行事に振り回されることも多いので、創作に割く時間が足りないのが現状です。中学2年生では、道徳、総合、音楽の縦横の授業で、歌詞と音符のつながりを考え、広島からの発信として『願い』の5番の歌詞を用いて1人ずつメロディーをつくり、最終的には学年で1つのものに仕上げていきました。中学3年生は、教科書どおりアドリブを学習しています。

## ●小中連携の実践

今、板橋区では小中連携ということで小学校から3人、中学校から3人のチームで研究をしています。そこでもやっぱり鑑賞についていろいろお話は出てきますね。

例えば、さきほどから話題になっている〔共通事項〕に

重きをおいて、「この曲はいくつに分かれるでしょうか」と聴き方のヒントを示して指導される先生がいらっしゃったり、かつて時間があつたときには、「図式化」という曲を聴いてイメージしたものを絵にする活動をしていましたが、今ではかなり時間がかかるので難しくなった、などといった情報交換がされています。

中でも、小中で共通の話題になったのが「今日、音楽の授業でこういう曲を聴いたよ」と隣のクラスのお友達に教えるとき、どういう言葉でこの曲を紹介するでしょうか？」といった内容についてです。聴いた曲を言葉にして友達に伝えるためには、子どもたちはもちろん自分なりに考えていくことが必要になります。小学校と中学校ではそうした言葉の問題にポイントを絞って、鑑賞の授業を進めていきたいと思いますということになりました。それですぐ結果が出たというわけではありませんが…。

## ●紹介文と批評

とりあえず今は、紹介文を書こうということで、鑑賞した音楽を言葉で表す活動を進めています。ただ、紹介文が

いくつか出来上がってきてはいるのですが、「じゃ、それを評定にどうやってつなげるの？」と言われたとき、そこから先に進まないんです。鑑賞は評定につなげていくものなので、そこが悩み所です。「関心・意欲・態度」もそうですが、「音楽的な感受や表現の工夫」もどうやって評定につなげていくのが課題です。

それから、「イメージ」という言葉は〔共通事項〕にはありませんが、「雰囲気」という言葉は出てきます。その雰囲気がすごく厄介で、それを僕らはどうやって扱おうかと話し合っています。この間の会議でも、「雰囲気というのはイメージとはちょっと違うけれど、とりあえず分かりやすいように、今この場だけイメージという言葉に置き換えて考えましょう」ということになりました。「紹介文には自分のイメージしたもの、風景や時期はいつなのかといったことを入れたほうが分かりやすいかもしれないね」と言ってアプローチすれば、子どもたちは理解しやすいのではないのでしょうか。これがすべてではありませんし、一つの手段として今まだ研究中というところです。



## 谷山優司

〔町田市立金井中学校教諭〕

### ▶谷山先生からのキーワード

- ・ 創作活動と他の活動との関わり
- ・ 自己評価としての批評文
- ・ 英語科との連携
- ・ 創作における小中の違い

## ●創作活動と他の活動との関わり

中学では音楽の授業数が少ないのがネックになっています。創作に年間2～3時間確保できればいいほうです。そこで、創作として独自に題材を設けるのではなく、帯取りでの実践を行っています。例えば『時の旅人』を歌うときには、曲の中のポイントとなるリズムをあらかじめ抜き出して、事前に手をたたくなどの方法で反復模倣して練習し

ておきます。そうすれば、コール アンド レスポンスの方法で歌うとき、子どもたちは学習したことを生かそうとします。そういう材料を増やす作業をしています。歌ってみてリズムでつまずいたら「さっき手でたたいたリズムだよ、手拍子を打ちながら歌ってごらん」と言葉がけをします。そういう小さな積み重ねの必然性を感じています。

CMソングをつくる実践を見たことがきっかけで、それをまねて、クラスのスローガンに基づいたCMソングをつくる活動もしています。例えば、クラスのイメージをよく知る子どもたちが、スローガンに基づいてクラスのCMソングをつくるという経験は、将来彼らが就職した際など、なにか広報活動をしなければならなくなったときに生かせるのではないかと考えます。しかしただ漠然と「つくりなさい」というだけでは無理です。今はインターネットで昔のCMを見ることもできるので、そういったものを参考にしたり、替え歌からはじめてみたりします。CMソング自体は短いので、1時間の授業で簡単なものがだいたい出来上がります。

箏を用いた創作を行ったこともあります。そのときは「いったい1年間のうち何時間箏を扱っているのですか？」と聞かれましたが、特別多くの時間を使っているわけではありません。和楽器を用いるときは創作に限らず、ポイント

を絞って、これを教えたい、ということを明確にしておくことが大切だと思います。箏のよさを事前に研究して、何について伝えるかを絞る。そのためにはやはり、指導する側にある程度のスキルが必要になってくるのかもしれない。

## ●自己評価としての批評文

正直、音楽のよさや美しさなどについて述べることを批評という言葉で考えると、かえって難しくなると思います。むしろ、ここでのフリートーキングのように、とにかく結果的に批評になっていけばいいのであって、要するにキーワードを探すことが大切なのだと思います。

キーワードを探す作業は語学の勉強に近い感覚があるのかな、と思うんですよ。日本語を英語に訳すとき、実際には直訳だとおかしい表現になることがありますよね。何かイメージがあって、それは英語だったらどういう表現になるのかと考えることだと思うのです。音楽を言葉にするには、まず自分の中でキーワードをいろいろ組み合わせながら、さらにクラスの中にはさまざまな意見があることを知り、どれがいちばん近い考え方なのか、友達の意見も参考にして、一言でもいいから書いていく——そんな形で今は批評に取り組んでいます。

ただ、文章化となると、果たしてどうなのか、とは感じています。先日ある講師の先生がおっしゃっていたのですが、書く作業に重点を置しまうと、そのことだけに集中してしまう。それはまた違う。それを言葉として表現するのは悪いことではないけれど、そのことだけに固執してしまわないか。批評文を書かせるためにワークシートを作るのではダメだ、自分がどう思うのかということを明確に読み取ることができるようなワークシートにしなければいけない、と教えていただきました。

限られた授業時間数の中で凝縮した批評文を書かせたり、批評をさせたりするには、果たしてどういうふうにしたらいいのだろう、というのは僕もまだ模索中です。

## ●英語科との連携

石上先生から英語の話が出ましたが、歌から英語の学習に入ると英語を理解しやすいのは確かです。イディオムなどと言いますが、1個1個の単語だけを理解しても英語はつながりません。例えば「文法的に理解する」ということは、ある種、音なり韻なりを踏んで覚えて理解していくことだと思います。

『We Are the World』などの曲を英語の授業や他の教科とタイアップして取り上げると、効率がものすごくいいですね。英語の授業では歌詞を扱い、社会科でもアフリカ



について学習する。そうすると、音楽の授業では、たとえば「こここの音のぶつかりには、実は人の気持ちの混乱があるんだよ」というようなことを、背景から説明しなくてもよくなってきます。また音楽科以外の学習によってモチベーションも高まり、英語の発音のスキルも身につくので、音楽の表現も非常に充実してくると思っています。そのような言語活動というか、語学の部分もとても重要になってくるでしょうし、中学校では英語教育を行っているわけですから、英語との連携を意識して指導を考えていくことで、それぞれの教科にプラスの面があると思います。

## ●創作における小中の違い

中学では身体表現を取り入れないことです。でも小学校での身体表現の経験があるから積極的に歌ったり音楽を捉えたりできるのだな、と思うことがあります。創作においても、小学校と中学校の内容について、先生がたがもっといろいろと連携して、話し合っていくような場が必要だな、と思います。そうすることによって、例えば小学校の先生はこういうふうに指導していらっしゃる、中学校ではこういう思いがある、というのが分かってきて、「じゃあ小学校でこういう準備をします」「中学校ではそれを受けてこうしますよ」というように、もっとスムーズに連携できるのではないかと考えています。今、中学校で創作を行うときに「小学校で何を学んできたか」というベースで考えることがあまりないような気がします。いいきっかけかもしれないですね。



# ミーティングに参加して

小原光一 [前横浜国立大学教授]

**皆**さん方の今日の話し合いを聞いて、また新鮮な刺激を受けると同時に、これからの音楽教育、期待が持てるなと思いました。ここにおいで先生方だけでなく全国の全ての皆さんがそうでありたいですね。

〈つくって表現する〉という概念での「創作」は平成元年からスタートしましたが、指導要領の上では新しい教育が始まった昭和22年から、小学校では〈旋律あるいは小曲の作曲〉、中学校では〈まとまりをもった曲の作曲〉という形で「創作」が取り入れられていることはご存知のとおりです。

当初の指導要領には「まえがき」の中で音楽を構成する諸要素が一定の形式に従って動かされることによって、初めて音楽としての流れとなるという趣旨のことが強調されています。その後の推移の中で具体的な指導に関わる内容を表す文言として、例えば「和声づけや編曲」とか「即興的なリズム問答やふし問答」等々が示されたりはしますが、創作の指導は基本的には形式の枠内での〈旋律づくり〉を主流として行われていました。

昭和52年改訂の指導要領になると、それまで5領域に分けて示されていた指導内容が「表現」と「鑑賞」の2領域に括って示されるようになったこともあって、「創作」としてのプロパー性よりも表現領域の中の一分野としての創作指導のもつ意味の重要性が注目されるようになりました。しかし依然として「創作」の活動は従来ともそうであったような低調からは抜けだせませんでした。その当時は文部省が各教科ごとに幾つかの研究協力校を指定して、指導の実践を通して得た指導要領の問題点等を洗い出して、それらを指導要領の次期改訂に生かすようにしていました。昭和52年改訂の指導要領の実施状況の中で最も大きく表れた傾向は、音楽科にとって大変重要であるはずの創造的な活動に弱いということでした。確かに子どもたちは楽譜の読み書きが苦手でしたし、教師も指導には苦勞をしていました。その辺りに修正の手が加えられたのが平成元年告示の指導要領です。

そこでは、傾向としてとすると理屈が先で単調に陥り易かった〈旋律作り〉のほかにサウンドを楽しむことによって音に対する子どもたちの感覚面のよさを引き出して伸ばすことに重点を置いた〈音楽づくり〉の指導というもう1本の柱を立てることによって〈音楽をつくって表現する〉という活動に対して子どもたちの新たな興味を喚起することをねらいとしていました。これを機にこれまで低調を続けていた創作の活動はぐっと活気を帯

びるようになったのです。

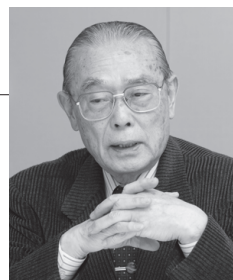
しかしこれは、サウンドを楽しむことに傾斜しすぎる余り、一方にはその場だけのやりっぱなしで終わってしまうという傾向が生じました。今回の新指導要領では旋律と響きを大切にすることの外に音楽の仕組みや構成を常に考える、ということが述べられていますね。これによってこの先、本当の意味での〈音楽づくり〉の活動が盛んになるだろうということを期待しているところです。これからはもっと音楽の流れが感じられる楽しい〈音楽づくり〉創作活動へと向かっていってほしいと願っています。

それから今日拝聴して強く思ったことは、ごく当たり前のことなんですけど、「創作」や「鑑賞」だけに限らず何においても食わず嫌いはダメだっていうこと。とにかくやってさえみれば必ず進むべき道は開けるはずなのに、全国的に見るとまだまだそれをしていない人がいます。一般的にはそうした現状がまだあるな、ということを感じました。やはり丸投げ指導ではどうしてもダメで、どこで何をどういう言葉で言うか。とにかく先生の指導がなければ「鑑賞」にしても「音楽づくり」にしても絶対に成立はしないということも、この場の話し合いを聞いていて改めて確認できました。

そのためにはこの際もう一度指導計画をきちんと見直してみようということ、これも大変大事なことだろうと思いました。今、授業時数が少なく、特に中学校は本当に大変だろうと思うんです。こうなれば他の分野との指導上でのリンクですね。いかにしてそこで妙味を発揮するかということが相当大きなことなのではないかと思うんです。

昭和52年の指導要領を思い出していただくと分かりますけど、それまでは「基礎」「鑑賞」「歌唱」「器楽」「創作」の5つの領域に分けて示されていた指導内容を、「鑑賞」以外の4つに関しては1つに括って「表現」領域としてまとめて示しています。これは正に分野相互のリンクの大事さを表しているのですが、残念ながらそのように読み取っていただけなかった方々が全国的にかなり多かったのではないかと思います。この点の理解が深まれば指導計画の顔もぐっと変わるはずですよ。

それともう一つ、これも昭和52年から始まったんですけど「学年の目標」が2つの学年を括って、つまり低・中・高学年の形で示されていますね。中学校は次期の平成元年の時から2・3年生が一括りになりますね。「学年目標」で目指そうとするものを2年間かけ



て達成しようとするこの意味を、指導計画にも色濃く反映させるべきだと思います。

例えば小学校の6年生は年間50時間なので以前70時間だった時よりも確かに減っていますけど、5年生6年生の2年間にわたる100時間の中で「学年目標」を達成する。中学の2・3年生でしたら2年間の70時間の中で学年の目標に迫る。そのような受け止め方によって計画を立てるようにすると、少しはやり繰りを工夫出来る余裕が生まれますよね。そんな風な考え方をしてみるのも少ない時間の中で効率的な指導計画を立てる上ではとても大事なかなと思っています。

それではそのためにどうするかですが、まず指導要領を改めてよく読むということだと思ふんですね。声を小にして言いますが、あれって全部はなかなか出来きませんよね（一同笑い）。ですからそれぞれの事項の言わんとしていることをよく見極めた上で、それらを無駄なく指導計画のどの場面にもどのような形にして持ち込むようにするのが鍵になります。限られた授業時数の枠内に収めるためには当然のことながら指導内容の項目や事項を横断的に見ることにより、指導に際して領域や分野間相互の効果的なリンクを積極的に進めるようにして学習効率の向上を図る必要があります。このことが結果的には間違いなく子どもたちの音楽力アップにも繋がるはずです。今、このような地道な作業に腰を据えて取り組み直すことが改めて求められていると思いますので、今度は声を大にして申し上げます（一同笑い）。

時間がありませんが終わりに一言。新指導要領の鑑賞領域に新たに示されている、聴いた音楽から感じ取ったことを言葉で表したり根拠をもって批評したりすることに対して、よい話し合いがされていてよかったと思います。鑑賞指導の本質に深く関わる大事なことだけに是非とも上手な指導の工夫を工夫してほしいと思います。自分の思いを文にして表すことは大事ですが、学校っていうのは集団で生活しているのが本来の姿ですから、友達の考え方や仲間との対話を共有できる場が設け易いメリットがあります。そうした場で互いに示唆を受け合いながら自分の考え方をより広く豊かにふくらませていくというのは、学校での鑑賞活動ならではのよさですから、大事なねらい目の一つになるのだと思います。

皆様方の一層のご活躍を期待しております。